

助け合っていた時代

野辺地町にある実家前の道路が坂道になっていて、冬期は道路が凍結し、信号でいったん停まってしまうと、その坂を上れない車が多数ありました。外から「キュリュキゆる・・・」というタイヤの空回り音が茶の間に聞こえてきます。すると、そこに居る誰かが「さあ出動だ！！」と一声。その場に居る全員でジャンパーや帽子・手袋をつけて外に出て車を押します。その当時、車はFR（後輪駆動）がほとんど、4WDなんてあまり普及してない時代、道路の除雪も今よりかなり大雑把、車もタイヤも道路も発展途上。だからこそ、知らない人の車でも雪や轍（わだち）にハマって困っている時は、自分の車を降りて脱出を助けるのが常で、自然に助け合って生活していたような気がします。

車やスタッドレスタイヤは年々進化し、除雪も場所にもよりますが、昔よりはるかに良くなっています。その反面、雪にハマっている車に対して無関心になっているような気がするの私だけでしょうか。

昨年2月、大寒波に見舞われた時、午前中に兄・私・嫁さんの3台の車が立ち往生するという事態に遭遇しました。兄の車を助けに行った私自身の車がハマリ、戻ったところで嫁さんからSOSの連絡。いつもは10分で行ける場所が迂回及び渋滞で1時間半もかかり、到着した時には嫁さんの車は脱出していました。

「私の車がハマっているのを見た人が、道路に自分の車を停めて、後ろから来る車にも声を掛けてみんなで押してくれて脱出できた」との事。助けてくれた方の行動力に感謝すると共に、それからは「ハマっている車を見かけたら必ず助けよう！」と心に誓い、冬場は車のトランクにスコップと防寒具一式を入れて、いつでも困っている車を助けられるようにしています。

困っている人を見かけた時、自然に助け合っていた良き時代を子ども達にどう伝えるか？まずは、困っている人を敏感に感知する自分自身の触覚を磨きたいと思っています。

雪往生（ゆきおうじょう） 嬉しいひと声 「押しますか？」

藤川俊彦（2月2日更新）